

平成25年度「みえの現場・すこいやんかトーク」(木曾岬町)の概要

11月24日(日)に木曾岬町の木曾岬町商工会館で「みえの現場・すこいやんかトーク」を開催しました。

当日は、「木曾岬トマト部会」の皆さん8名の方にお集まりいただき、活動内容や将来への思い、行政へ期待していることなどについて、ご意見などをお伺いしました。



木曾岬町産のトマトを試食しました。

【参加者からの発言】

参加者の皆さんから、以下のようなご意見をいただきました。

Q. 活動を通じて、楽しかったことや嬉しかったこと、農家に携わることで自慢したいことなどをお伺いしたい。

- 木曾岬のトマトは主に三重県や名古屋市に出荷しており、県内では50%くらいが木曾岬町産である。長島町産のトマトと合わせると県内のトマトの8割程度を占める。
- 普通のトマトの糖度が5度から6度くらいのところ、新しい木曾岬のトマトの糖度は7度以上もある。今は糖度の分類である「GⅡトマト」という名前だが、知事にいい名前を考えてほしい。
- 以前はトマトの箱詰めを手作業でしていたが、15年くらい前に新しい選果場ができて、作業時間が半分に減った。
- 親から受け継いで農業の仕事をやり始めたが、当時は同世代や頼もしい先輩もたくさんいて楽しかったので、親から受け継ぐのは当然だと思っていた。今は3代続いているという家が、数軒しか残っていないのが心配である。
- トマト農家をやってみて思ったのは、命令をするのも自分、成果を出すのも自分なので、自分で動かないと結果が出せないということである。
- 自分たちでも失敗するときはあるので、みんなで協力しながら、困ったときは助け合って仕事をしている。30年間続けられたのは、友達や先輩がいたからだと思う。
- お客さんが「木曾岬町のトマト」を食べてもらって、「おいしい」と喜んでもらえるのが嬉しいことであり、楽しい。

Q . 活動をしていく中で、どんなことが課題だと思っているか。

自分の親くらいの世代がほとんどで、同年代があまりいない。今では生活できるくらいトマトの生産はできているが、生産者が少なくなると、選果場に回せるくらいの生産量が維持できなくなり、前のように手作業に戻ってしまうのではないかと心配している。

農家を始める人は親から継いだという人が多く、新規就農する人はあまりいない。ゼロから始めるのはお金がかかるので、何かきっかけがないと就農しにくいという現状がある。

使っていないハウスが増えてきている。誰かが受け継いで使っていることもあるが、空いているハウスに就農を希望する人来てもらえれば、空いているハウスも減り、人口も増えると思う。

平日でも三重テラスは賑わっていた。レストランで食事をしたが、その時に出されたトマトが「木曾岬のトマト」ではなかったので、使っていただければと思う。物産店で並んでいる商品は加工品が多いので、生鮮食品を販売するのは難しいかもしれないが検討してほしい。

木曾岬産のトマトを全国でPRしていただきたい。

親は子どもに農家になるよりサラリーマンになることを勧める。去年はトマトの値段が上がったが、今年は下がるといったように、収入面が安定しないということが理由である。燃料代も高騰しており、トマトを作らない方がいいのではと思ってしまう。

飛行機の騒音が気になる。時々、墜ちてくるのではないかと思うくらい低く飛んでいる。

食品偽装の問題があったが、この影響で農家の経営が傾くおそれもある。こういうニュースがあると、生産者の努力は何だったのかと思うので、食品行政にも目を向けてほしい。

【知事の発言】

皆さんからのご意見を受け、知事からは次のような発言がありました。

「G トマト」はさわやかで甘くておいしい。みかんや米には名前を付けたことがあるので、言っていただければ命名をしたいと思う。

他の地域で、相談できる兄貴分みたいな人がいると良いということを聞いたことがあるので、そういうことをヒントに、県でも新規就農リーダー制度を始めて、新規就農者等に支援を行っている。

県内や名古屋の桜通りカフェでPRしていて、木曾岬町のトマトなども売っているが、お客さんの反応が良く、好評である。

南部地域活性化の事業で移住フェア等を開催しており、県南部地域への移住に向けた情報発信をしているが、県全体についても移住のためのPRをしていけるように方法を考える。

三重テラスに生鮮食品を置いてほしいというニーズが高いのは認識している。東京まで運ぶコストを考えると難しい部分はあるが、生鮮食品を三重テラスで販売でき

るような方法、例えば、期間を限定して生鮮食品を販売したり、直接品物を置かずに、パンフレットから選んで宅配するようなことも考えたい。レストランで使う食材は運営事業者と話をしており、100%三重県産にしたいが、難しい部分もある。食材の公募会等に多くの生産者から手を挙げてもらえるように、情報発信を行っていききたい。

全国的に三重県産品をPRする中で、木曽岬のトマトもPRをしていくように担当課の方に伝える。

燃料費が高騰していくことについて、油を使う業種である漁業などは国に提言しているので、そういう問題意識はある。行政に何ができるかを考えないといけないが、自治体がすでにやっても伝わっていないことも多々あるので、努力していかないといけない。これからどうしていくかを整理して伝えていく。

食の安全・安心確保条例はあるが、それを見直す方向で、今議論が進められている。不適切表示は罰則も含めて検討をしている。県議会とスピード感を持ってやっていきたい。



【木曽岬トマト部会とは】

「木曽岬トマト部会」は、現在、生産者戸数37戸、ハウス面積20haの生産規模で年間57万ケースのおいしいトマトを県内市場や中京市場へ出荷しているグループの皆さんです。